水無月

こんなにもぼくの中に
涙があるんだと思うほど
ぼくは泣いた

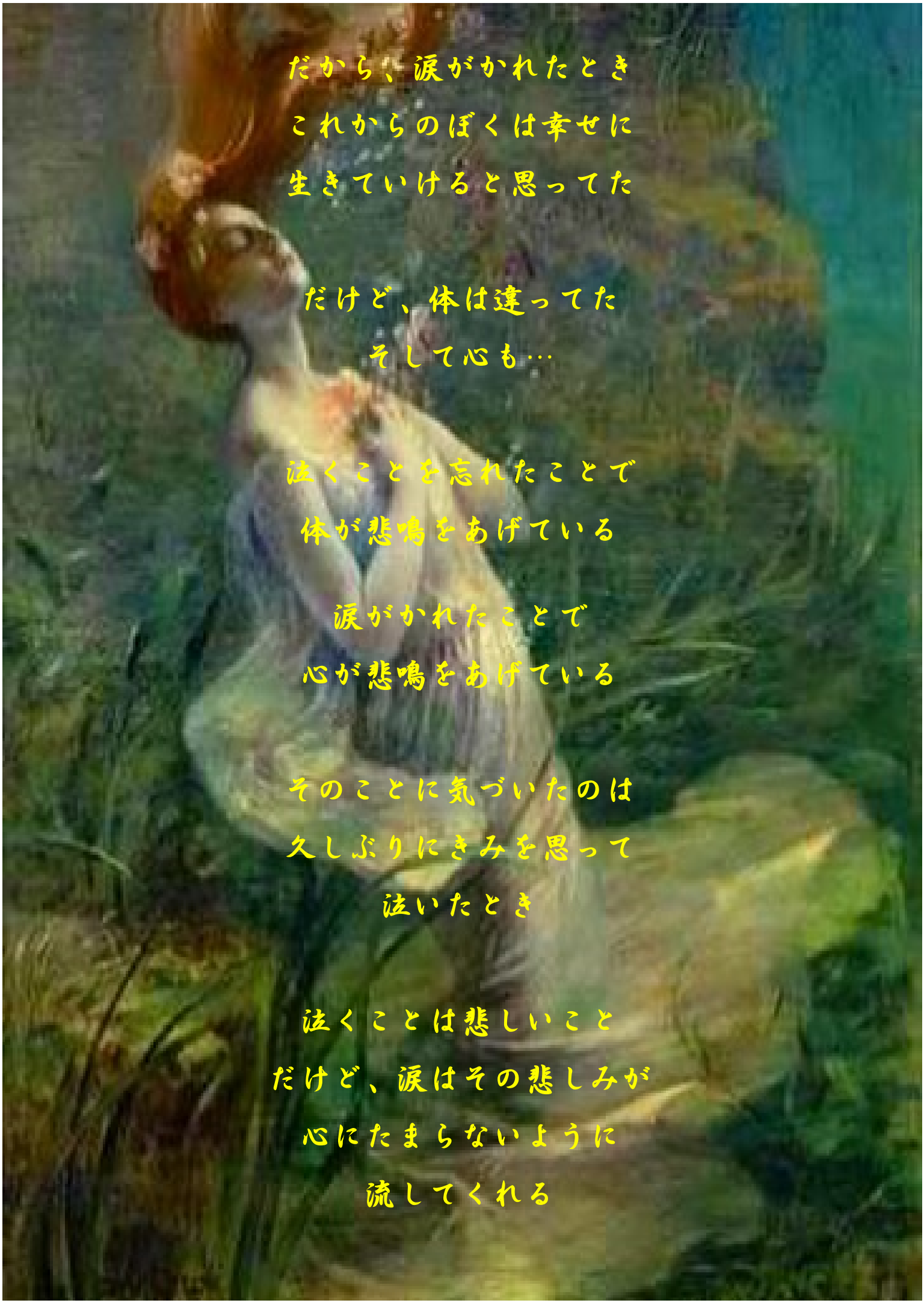
泣いても泣いても
涙はかれることはないんだと
そう信じてた

その涙がかれたのは

泣くことになれてしまったのか
時が心を癒してくれたのか

人生を幸せに生きるためには
いつも笑顔でいることだと
ぼくは思ってた

微笑みを絶やさないことが
幸せの印だと



だから、涙がかれたとき
これからのぼくは幸せに
生きていけると思ってた

だけど、体は違ってた
そして心も…

泣くことを忘れたことで
体が悲鳴をあげている

涙がかれたことで
心が悲鳴をあげている

そのことに気づいたのは
久しぶりにきみを思って
泣いたとき

泣くことは悲しいこと
だけど、涙はその悲しみが
心にたまらないように
流してくれる

雨が大地を潤し

生命に新たな息吹を与えるように

涙もまた心を潤し

私たちの命に

新たな息吹を与えてくれる

それは、微笑みよりも穏やかな

甘く優しい水無月の雨